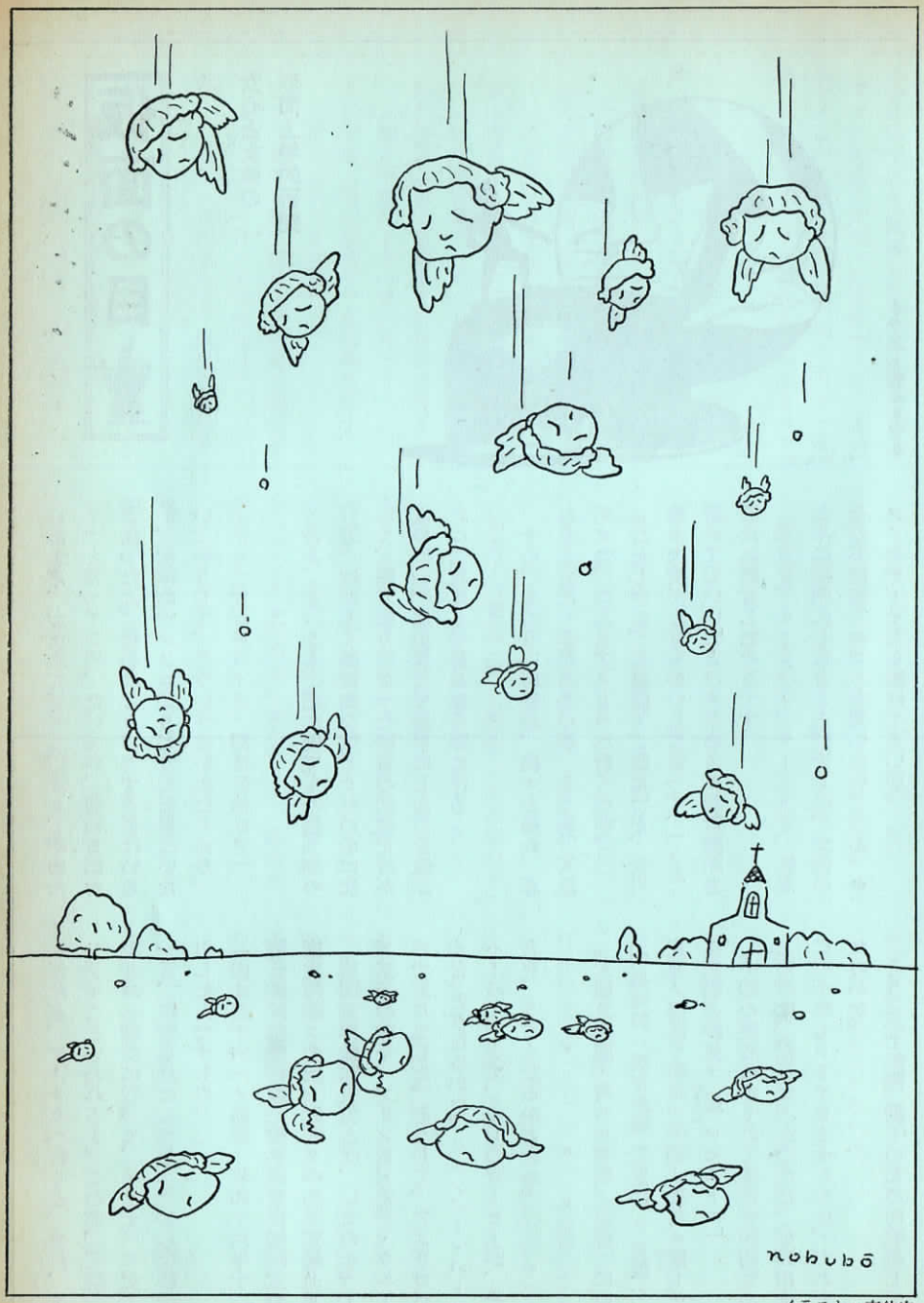
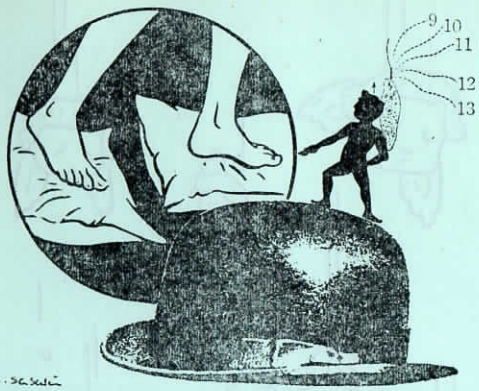


イラスト・南伸宏

オワリナキヨノメデタサヨ

仮面の目

女心と女体の形而上学的研究



イラスト佐々木マキ

「あーあ、女なんて、もう、オレ、やめたよ」と言ってる男、たいてい、前の日に女と逢った人。女心にこりごりする男はいるが、女体にシンソコこりごりした男はいない。そうして、こういう言いかたもある。

「オレ、女がキライさ。閉所恐怖症さ」

＊　＊

ああ、きょうも、花に寝てもの思う春の行方。けだるく断続的な気まぐれの中に沈んで、散り散りになった硬質の記憶だけがものうい。はかなくて過ぎにしかたを数ふれば　花にもの思ふ春ぞ経にける

＊　＊

その、ものうい肉感が、漠々と揺れ、暮れるともなく暮れる心の春。そうか。天皇がまた、こんどアメリカへ行くのか。

「ことし中に、天皇陛下ご訪米」と、安川駐米大使がカンちがいして言って、「うん。賭けてもいい」とバクチのスキな新聞記者諸氏に断言したそうです。

天皇を、ルーレット、マージャン、競馬なみに同列にしたところ、オレは、大使のその不謹慎なセンスを買いたい。うん。キタノカチドキなら賭けてもいい。

だけど、アメリカへ行くと、また、イヤラシイことといわれるよ。この前、天皇、イギリスへ遊びに行って、エリザベス女王に一言、注意されたんでしょ。こんな勅語を出した人ですもの。

「山本五十六ヘノ勅語　昭和十六年十二月

聯合艦隊航空部隊ハ敵英国東洋艦隊主力ヲ南支那海ニ殲滅シ威武ヲ中外ニ宣揚セリ」

英国東洋艦隊主力とは、いまのチャールズ王子の称号、プリンス・オブ・ウエールズでありました。そうして、アメリカへ行くと、どうなるかな。リメンバー・パール・ハーバー。さて、オレのコーヒーが、そのとき、うまくなるかどうか。

＊　＊

「米国及英国ニ対スル宣戦ノ詔書」にいう。

「米英両国ハ残存政権（重慶）ヲ支援シテ東亜ノ禍乱ヲ助長シ平和ノ美名ニ匿レテ東洋制覇ノ非望ヲ逞ウセムトス」

平和の美名にかくれて東洋を制覇せんとしたのは、だれだったのかな。小野田少尉に三十年もツライ目させたのは、だれだったのかな。

そう。三十年間、陛下のために戦争して来た小野田サンと、裁縫したりアナ掘って、チマチマと生活テキだった横井サンと、どっちをとるかで、キミの性格が知れる。やっぱり、このさいズッコケ横井をとらなきゃァ。

＊　＊

天皇家にはフシギな人がいるよ。明治天皇って、子どもが十五人いたんですって。

稚瑞照彦尊（第一皇男子）生母葉室光子
（明治六年九月生誕。即日逝去）
稚高依姫尊（第一皇女子）生母橋本夏子
（同六年十月生誕。即日逝去）
薫子内親王（第二皇女子）生母柳原愛子
（同八年一月～九年六月）
敬仁親王（第二皇男子）生母柳原愛子
（同十年九月～十一年六月）
大正天皇（第三皇男子）生母柳原愛子
（同十二年八月生誕）
韶子内親王（第三皇女子）生母千種任子
（同十四年一月～十六年九月）
章子内親王（第四皇女子）生母千種任子
（同十六年一月～九月）
静子内親王（第五皇女子）生母園祥子
（同十九年二月～二十年四月）
猷仁親王（第四皇男子）生母園祥子
（同二十年八月～二十一年十一月）
昌子内親王（第六皇女子）生母園祥子
（同二十一年九月～昭和十五年三月）
房子内親王（第七皇女子）生母園祥子
（同二十三年一月～）
允子内親王（第八皇女子）生母園祥子
（同二十四年八月～昭和八年十一月）
輝仁親王（第五皇男子）生母園祥子
（同二十六年十一月～二十七年八月）
瓔子内親王（第九皇女子）生母園祥子
（同二十九年五月～）
多喜子内親王（第十皇女子）生母園祥子
（同三十年九月～三十二年十一月）

明治天皇には照憲皇太后という奥サンがありながら、ほかに五人の女性がいらっしゃって、五男十女の父であらせられたことになり、ああ、女体にこりごりした男はいないなどと不謹慎なことを言うと、駐米大使がクビになる。

十五人の子どものうち、即日逝去二人、あとの九人も一、二年でなくなられまして、残る四人がご長命ということでありまして、なんだかしらんが、この一覧、仔細に見ているだけで、逸楽、狡智、酩酊、不軌、さまざまな思いが浮んで、好奇心と冒険の抗しがたい誘惑にかられる。

＊　＊

例の「外務省機密文書事件」の蓮見サンって、これはこれでステキな人だ。判決を受けた直後、

「もう、そっとしておいて。早く忘れられたいの」

なんて、可憐なことおっしゃっておいて、自分からすぐ、あっちこっちの週刊誌に手記書いたり、対談したり、なかなかやるのです。その悖徳、その分別のなさを、オレは買う。

この人、家は西山太吉ッァンの前にも、ある男性とアソんで、外務審議官室のジョニ黒持ち出して貢いだり、一流紙の数人の記者ともアソんでたりして、あの、奥村彰子サンのように、男にこりごりしない刑架の女でした。

＊　＊

すべての文書に、秘密はない。秘密は心の宝石、恋人の懐剣。ウソツキの女王のペーゼ。セロッキの「ピアノへの提示」。

（金仮面）

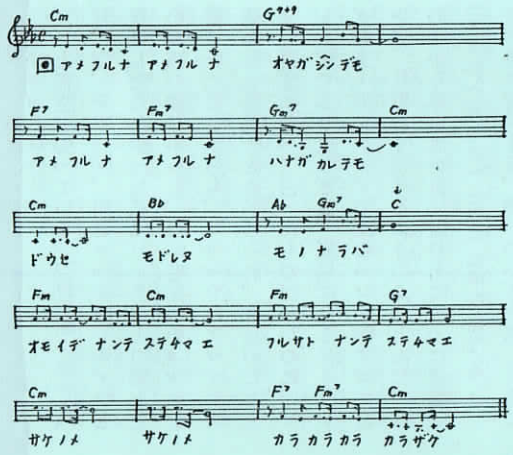
大阪野坂慎悟

能勢井吉利人作詞
順人作曲

雨フルナ雨フルナ
親ガ死ンデモ
雨フルナ雨フルナ
菊ガ枯レテモ
ドウセ戻レヌモノナラバ
想イ出ナンテ葉テチマエ
ブルサトナンテ葉テチマエ
酒ノメ酒ノメ
カラカラカラ辛酒

雨フルナ雨フルナ
山ガ焼ケテモ
雨フルナ雨フルナ
川ガ涸レテモ
兎モ小鮒モ絶エハテタ
枯田ニヤ鳥勘三郎
フルサトナンテ燃エチマエ
風フケ風フケ
カラカラカラ落葉松

雨フルナ雨フルナ
仲死ンデモ
雨フルナ雨フルナ
孫ガ死ンデモ
桃栗三年柿八年
出カセギ出タラ百年目
フルサトナンテマボロシヨ
酒ノメ酒ノメ
カラカラカラ辛酒



イラストレーション＝後藤一之

住所不逞 悪妻日記

文と題字・カット
山本美智代

新しい年は、白い透明な国で目覚めた。スキーに乗って、白い峰から白いベッドへ直滑降！ 粉雪けちらし、それは夢の速度だった。

冒険の旅には、勇気と忍耐と謙虚さと覚悟とが要求される。またこの城においても同様、不安は夜の月に、希望は昼の太陽にのって、いずれここを立去るべき旅人たちの上に、確実にめぐってきていた。

標高二千メートルの八方尾根第一ケルンでホワイトクリスマス。さざめく冬の星座にワインで乾杯!! 一夜明けたら〝青天の霹靂〟黒い稲妻に撃たれた。それも若くて独身の男性にだ。朝陽に新雪が輝き、一面の粉ダイヤがキラキラ眼を射す。ヨーデルが歌い、ジャズピアノは鍵盤を踊る。白銀の峰々がカキッ！と青空を切っている。「酋長嘘ツカナイ、昔、空、青カッタ、明日キット晴レル！」と昨夜したたか酔った私はパーティーの席上そのお酒の強さからと、白い毛皮のチョッキを着ていたことからも、ヒュッテのアマゾネス達から「酋長」とあがめられ、今日のこの天気を得意になって占ったものだったのに。ゲレンデでふり返りざま、真黒に光るボーリングの玉・ボクシングの皮のパンチがアゴに命中！ 八方にくだけるようにふっとんだ。口の中から赤い血が白い雪の上に散った途端、「アゴがハズレタ」と痛みに手を当てると、カクカク音がする。勢いついて突進してきたものは、黒いヤッケのスキーヤー。相手の頭でアッパーカットの一撃！ じゃ、なんなく私はノックダウンにダウンヒル。

麓の待合室で、張り絵のように鮮明な山並みを流し目しながら、往診に出たきり帰らないと言う先生を待つこと、一時間、二時間、三時間たち、タンカでかつぎ込まれる人や、人の肩にすがったり、大袈裟な患者が、廊下にまで待機している。洗面所に下痢患者ほど足しげく通い冷い水をハンカチにふくませては当てるのだが、数分で熱いお湯になる。自家エネルギーで、カッカと痛みが発動し、蒸気機関車が顎で走る。指に包帯をまいた坊やのお母さんが「貴女、どうなさったの？ 歯でもお悪いの」と聞かれてけ、もうガマンもこれまで。こんな所にいたら日が暮れて手遅れもいいとこだ。「こう見えても絶対骨は折れてるんだ」と、まだその時はどうだか解らなかったものを、妙に怪我の大小を争って、けちらす気分でそこを出た。友人の機転でそのお父さんが院長だった、長野の外科病院まで、石油不足を理由に嫌がるタクシーをやっとチャーターしてもらい、16年ぶりの大雪もショックアブソーバー、両手で顎かかえつつ、白い山また山を越えた。

光に透かし見るレントゲン写真は、ネアンデルタールかピテカントロプス、初対面のこれが己の頭蓋骨かと、我が文明本部も、一皮二肉むけば、なつかしき原始の香り！ 感動のあまり驚顎し、しばし眺め入っていると、「ハイ、こことここにここ、三ケ所折れてます」

「麻雀してたら、こんなことにはならなかったのにィー」とは雀族、「忘年会にチャンと出て、お酒のんでりゃ、よかったものを」と虎はほざきおり、いつもいっしょに滑るスキー友だちまで、「私を誘わないで勝手に行ったから悪い」と、「温水プールで泳いでりゃ、水着一つで安あがり、新しいスキー一式買い換えたり、いいとこ見せすぎヨ」、冬の河童のひがみ言。

「亭主ほったらかして、遊び廻ってるから、こんなことになる」ニヤリと笑って夫の代弁か、彼の親友が「いい薬だ」と言う。苦々しい味はするのだが効きめの方はカラキシ駄目。いずれにしろどれもこれも大同小異で的はずれ、「それでバチあたったんなら、とっくの昔にあたってるわ」と、けっこう口幅ったいロならきけるものだ。

「スキーで骨折とは！ ネェ〜」と大方の友人は笑いだす。「マンガチックな話」だとか、寄ってたかって人を馬鹿にしてェー！「ケガまで一風変ってる」？ せめて「さすがユニーク！」とぐらい言ってもらいたいものを、どう〈転んでも〉誉めてくれたりはしないのだ。

ところが実はアッパレ！「いいとこ折りましたねェ」と教授に感心され、「顎の骨は、ちょうど顔の添え木みたいなもので、しかも難かしい神経には関係ないとこだけ上手に折れてます」。もうちょっと下の方、首だったら一大事、すこし上の方、頭だったら、もはや恍惚どころか黄泉の人、それきりあの世を彷徨わぬとも限らない。

実際ありきたりな足や手など折っていたのでは、整形外科は超満員、凡人が押すな押すなの見ていて二重災難も心配しかねない混雑ぶり。ところがどうだ、ここ口腔外科じゃ、お正月など患者は四人、沢山の先生と看護婦さんに次から次とかしずかれ、広い四人部屋を一人で独占できたのだから。穴場をねらった如才ないやり方とは、こういうものだ。

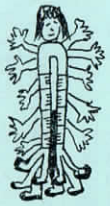
昔から機会があれば病院に、一度は入ってみたいと思っていたけれど、こういうことでとは、もちろん予期しなかった。事故や災難はフーッとひと吹き灰色の霧をかけられ、瞬時に運命の寂光を知覚してしまう。私はかねてから「死ぬときは、シマッタ！ と思うだろう」という実感があったのだが明るい雪の上に意識をなげ出されてから「ついにヤッチャッタかあ、これはヒョットして入院だなあー」と醒めた風に納得したものだ。16歳の時からスキーを始めて、何事によらずの恐いもの知らず、自殺者的な滑り方と折り紙つき、猫のようなころび方を自慢にしながらも、いつかやるとは覚悟していた。母でさえも「あんたのことだから、いつも、こんど怪我するか、今度するかとハラハラしながら、今回だけ何だか変に心配しなかったのが、こうだものォ〜」いずれそのうちと、待っていたような言い方をする。自分でならいざ知らず、せっかく二日酔を、ぼおーっと楽しんでるのに、いきなりぶつけられたことには不満が残る。「何！ 男か女か」と、まるでお産のときの

ような尋ねかたしてくれる人がいて「ハンサムな奴か？」と焼きもちやいてくれるのはうれしいが、関心あっても知らない素振り、幸い紳士の方から手練手管で攻めてきても、待ってましたとばかり肘鉄砲でやり返し、冷たく無視して身をかわす花の操がキイポッポ！貴婦人のように、ほくそ笑んでいたかったのに、せめて「アゴボギボギ」までいかないで、昼下りのテレビドラマの奥様が、よろめく程度にしとけばよかったものを、後で気がつく何とやら、かえすがえすも口惜しいと、歯ギシリさえもままならぬ、ただただこの身の腑甲斐なさァ〜。

恋人同士はここでドッキング、飲み友だちもここで待ち合せ、物の受け渡しと一時預り、久々の知人同士の顔見せから、遊びの話、仕事の話と花が咲き、人の紹介、就職の世話、星占いやら夢判断、商売成立、物々交換、愚痴とのろけと自慢まで、浮気のアリバイ、夫婦喧嘩の仲直り、上京客の宿泊所確保から、果てはお見合いに至るまで、世のありとあらゆるくり事が、ただじっとしている私を中心に、めぐりめぐって色とりどり、病院にいても独り楽しめるの極意——コマの辛棒というものだ。

点滴・おもゆ・完全流動食・静脈注射・抗生物質の投薬・全身麻酔・切開手術・抜歯のおまけ付きと、五体ピンシャンしたまま、悪いのは口だけで、それも先天性ではなく、事ここに至ってシャットアウトされただけなのに、重病人に引き立ててもらう破目になった。今迄の怠慢を一挙に挽回、花札で五光・四光・赤タン・青タン・イノシカチョウの何役も、一度に作ってしまったようなもの。リーチ麻雀で裏ドラポンポン乗ったようなもの。

〝お肌の曲り角〟は疾っくに過ぎて、〝お腰の曲り角〟までは行かないが、大事な「命の曲り角」なのかどうか、女の33は厄年だ。無鉄砲ついでにまとめて面倒みてしまえ！貯金下して後は野となれ山となれ！古風な俗習に義理たてて、つとめあげた退院後の、我が身にかかる、お礼まいりは如何ばかりかと、今は神経過敏に御身いといつつ、戦々恐々の日々である。



「病院って、イソガシとこやねェ〜」

見舞いに来てくれる人に、第一声！私はそう言うことにしている。

朝は六時に起こされて、やれ検温だ、脈搏だと、少々変化があってもよさそうなものを、血圧も基準どおりにおし測られる。まどろっこしい点滴に時間をつぶし、苦い薬に痛い注射、尿の検査に血液検査、診察と治療と処置、終ればレントゲン写真、患部の学研用スライド撮影、歯型やチンキャップの別誂えもある。毎日三度の食事は最大の仕事、追いたてられて手間暇かけて、やっと終えたら、ウォーターピック（水の楊枝）で口の洗浄にひと苦労、看護婦さんから「お食事は、どれぐらいとれてますか？」「ハイ、合計三五〇〇cc です」「お通じは？」「ハイ、一回ありました」「軟らかいですか？硬いですか？」「ハイ、普通です」「お小水は？」「ハイ、8½」「エッ！まあいやネェ〜山本さんは馬鹿ばっかし〜」「途中で止めちゃったのォ〜」「ハイ、それからオナラ一回」「またぁー、たずねたことだけでいいの」

加えて毎週、教授回診と助教授御回診、どういう訳か、大名行列もものしいのは、助教授の方だった。

下界で命を張って生きるのも、楽ではないが、ほとほと自分の命と毎日毎晩、付き合っていくだけでも、大変な事だ。

正真正銘の〝骨折り損の、くたびれ儲け〟の辛酸をなめている。噛みしめられないから。

大学病院は静かな広いキャンパスの中にある。俗っぽい今様建築物とは異なる古風な赤レン館、青サビ屋根に天窓、八角堂の解剖学教室、明治をしのばせる洋館が見下ろせて、巷の騒音からも、時代からも取りのこされたような一角は、大江健三郎の小説にでてくる実験用の沢山の犬が時折いっせいに奇妙な声で鳴きはじめ、夜ともなれば狼のような遠吠えになり、〈今日かぎりの命ともがな　と嘆いているのかどうか哀感せまり、遠くから運びこまれる救急車のサイレンと重なったりすると、イヌ事とは思えない、沈うつでいたたまれぬ思いに眠れぬ人も多いだろう。

脳外科の佐野教授が、「時々テンカンを起す」というので治療をうけに来ていた少年の頭に穴を開ける、医学上まだ成功例のない危険な大手術を、本人と家族の納得なしに強行し、結果は寝たきりの意志表示も出来ない癡人にされてしまった事実が、四年間も放置されたまま、「あまりにも非道だ」という家族の訴えで、初めて明るみに出された。

それは、東大闘争を起した青医連や全共闘とそれにつづく学生や職員によって激しく糾弾され、権力のおきまりコース〈本質をかえりみない無責任な収拾と居直り、抑圧の果ては逃避と卑劣な策動〉であったのだろう、十一月某日、彼等によって教授室と医局事務室が占拠された。もちろん夫もその一人であったにちがいない。

冬休みの大学は、朝九時でもひっそり人影もまばら、医学部本館の前には、例の事件を訴えて教授を弾劾する、タテ看板やあちこち貼りつけられたビラやステッカーばかりが、虚しく雄弁をふるっていた。

長野から連絡し、電話で申しあわせておいた待合わせの時間に、めずらしく二十分も遅れて現われた、相変らずの鬚と長髪をボサボサに、白い息をはきながら「やぁワルイわるい！寝坊しちゃった」と長い足で駈けてくる夫には、二週間ぶりのおめもじであったか。

母だけ付添って診察室に入ったが、国民健康保健の用紙で、所帯主の名前が知れてしまった。五人の先生方をしたがえた、まだ若そうだがいかにも偉そうな先生から診察を受けたので、難かしい手術なのかと心配していたら、「御主人は？」「——」「スキーは一緒じゃなかったのですか？」、廊下で待っていた彼が呼ばれた。「かねがね君のことは、恐ろしくてェ〜お隣りの脳外科を占拠したり、口腔外科までそんなことしないよう頼みますヨ」、皮肉っぽいが冗談にはちがいないと私はニヤリ、痛いアゴがゆがんで苦笑になった。ところが誰もみな真顔なのに、あわててビックリ！立ち上り際に、何とも言わない彼に、教授がまた「本当ですよ、くれぐれも頼みますヨ！」と念を押す念の入れようであった。

即日入院させてもらい「随分イヤ味な感じやったなあ〜、占拠されるの心配するような悪いこと、ここでも、してるんやろか？」と彼が言えば、私も親しい若い学生Y君は愉快そうに、「美智代さん、デモの隊列つくってお見舞、行ったげましょか？」

結婚して九年目、その半分も夫妻一緒にお正月を迎えただろうか？お正月が二人の結婚記念日だから。結婚式というのは、若かっ

た二人にはテレクサ過ぎる、お正月ならどうせ〝おめでとう〟と言われるし、少々の晴れがましさも、便乗してごまかせる。そう考えついたのは、私の方だったろうか？　そういうお正月でさえマイペースでは、普段は推して知るべし、てんで別々、べつ行動で、あたりまえなのだ。

日頃から闘争現場にはりついている上に、十一月以来それも煮つまって終盤戦なのか、「当分、帰れそうにないから学校で寝泊まりするワ」ということなので、時々衣類と洗濯もの運びに行って「ア、元気ィー！」と顔を合わせる。だから今年のお正月もことさらのことはなく、そのままの延長で、こちらはスキーか山へ、お酒か麻雀にと、明け暮れるはずであった。うわっ面しか興味のない私の観察によれば「活動家」というなら、よほど私の方がそれにふさわしかった。いい所、好きな所ばかりを嗅ぎわけて、ここかと思えば、また、あちら、ヘラヘラシャラシャラ頑張らず、頭も出さず尻尾も出さず、風の吹くまま、気の向くままに、今日は何処まで行ったやら、嫌いな人、恐い人には捕まるものか、すれ違っても、ぶつからない。甘い方へ、やさしい方へ、菜の花、飽いたら、桜にとまれ。

〝まったく夫は正反対。「日本は東京、東京なら山手線の中、中もまん中、東大の中、そこで十分こと足れり」と、じっくり堂々十年以上も動こうとしない。彼の方はそのままで私の方が天変地異、「蝶のように軽々しく、蜂のように蜜を吸う」の世界タイトルを、一発のアッパーで奪われて、好きでもない東大に、彼が植物的に根付いているなら、こちらは昆虫的にか、枕ならべて寝ついてしまった。暮れもおしせまった28日、入院患者も出稼ぎ人も、家庭や故郷の寝ぐらに帰るというに、又々時流に乗らず逆らって、東大講内に身柄拘束されて、お蔭で夫婦そろって共に新年を迎えることが出来ました。

これぞ〝怪我の功名〟です。

今日は手術の準備のために、上下の歯型をとりに外来の病棟に来た。待合の廊下は薄暗く、両側の粗末なベンチに様々な人達が、寒そうに、さえない顔付きをして並んでいる。ドーミエーの画の『三等列車の人々』を思い浮べる陰うつさだ。それに比べて、のぞき込んだ、外来の診療室は、何と素敵な部屋なのだろう。明るくクールな、わたし好みの超現実的光景だ。待っている間、ただ一人ずうっと見ている私を奇異に思った人もあるかもしれない。室内にベッドはないが、20台ぐらいの鉄の椅子が窓の方を向いてズラリと二列に並んでいる。歯医者さんにお馴染みの方は、よくご存知だろうが、私は初めてなので便利なのと愉快なのに驚いた。それぞれランプがついて、小さな扇風器のプロペラまでついているのもある。ペダルで高さがスウーッと調節できる。リクライニングになり枕の角度もお望み次第、回転も360度可能だし、テーブルもサッと前に、スイッチ入れるとコップにチャラチャラァーと水が出てくる。受け皿や流しもついている。ボタン一つで動く電気仕掛け、リモコンつきで引き出してさっと元に戻る。電気ドリルやスプレーに、あらゆる小型で清潔な大工道具がそろっている。ちっちゃな薬ビンは、透明なグリーンと茶色とブルーで、体の割には大っきな頭を寄せあって並んでいるのは、何とも可愛らしい。ピンセットや鋏その他器具や道具がいっぱいある。私のお気に入りは、スプーンの先に鏡がついたのか、小さな鏡に長い柄がついたのか、どちらに発生起源をもつものかは知らないが、ただミラーと呼ばれている。半円形の銀の皿の上には、必ずそれがのっかっているから、先生のちょっとあっちへ行かれた隙に、そっと手にとって目を写してウインクしたりする。白いナフキンをかけてもらうと、いつも「さあ食事だ！」という気分になるが、口に入ってくるのは、決しておいしいものではない。口をあけて先生の顔ばかり見るのも悪いので、ついあたりをキョロついたりネクタイの柄や女医さんのセーターの菫色がきれいだなあと、マスクをした先生の鋭い眼は、口の中だけに烈しく向けられているのに、間近で眼と眼が合ったりしないかと、ドキドキしたり、「アア～ンしてごらん」とか、大口を開いている人をみたりすると、つられてつい自分もあけてしまうことがあるが、先生も大きなマスクの下で、ひょっとして？　と不謹慎な想像もする。

私は科学好きな、半ズボンの少年、好奇心で目をキラキラ輝やかせている。コンパクトな例のマジック椅子の間を、白衣の医師や看護婦さんが、テキパキ動いている。ステンレスとガラスのクールで硬質な世界だ。生き生きとしているのは機械の方で、ニンゲン臭さは息の根をとめられたのか、遠く小さく影をひそめて、メカニズムの完全支配下の宇宙ステーション。

背は高いのにエクボで童顔の先生が「さてッ」と、ゴムか石コウのようなものをまぜあわせながら、近づいて、U字型の鋳物を、ひねくりまわしてサイズを合わせたり、鋏でジョキ～ッと切り落したりを見ているうちに、何時しか幼い日の〝お医者さんごっこ〟を思い出していた――「私がこんどはお医者さん」と目薬の空ビンに水を入れて注射器にしたり、糸まきに黒い太いゴムひもつけて、聴診器、看護婦きどりや「××ちゃん、じっとしていないと、もっとイタイイタイしますヨ」なんて言ったりする――ピタッと冷たいものを、グワッと口の中に押しこまれて、記憶からさめた。私の幻想のつづきだと、担当のK医師は患者にされかねないところだった。「そのままチョット固まるまで我慢しててください」、唾が口の中にたまって吐きそうになる。ガバッ！　とはずしてもらうと、豪快な歯型がついてる。総入れ歯をつくってもらう時にも、これをやるそうだが、さすが子供のお医者さんごっこに、こんなのは一度もなかった。

昨夜、母が帰るころ激しい雨と風だったのが、夜中に窓が急に明るくなっているのに目が覚めて、トイレに立つと、外はいちめんの夜の雪。外燈にぼんやり照らし出された輪の中に、細く激しく深々と降っているのがわかる。今年三度目の雪だ。朝刊の一面に、淡雪のために通勤の足がとまどっている大きな写真が出ていた。母がいつもならもう着く時間なのに、どうしたのかと心配になる。お向かいのベッドの奥さんまで「お母さん今日は遅いのねえ」もう出てるか？　とも思いながら、10円玉つまんで廊下の赤電話を廻すと「アッみいちゃん、きのうの晩、足袋も着物もビチャビチャに濡れてしもて、風邪ひきそうやから、あしたにするわぁ～」仕方なしに共同炊事場で、コトコトスープを煮たり、ミキサーかけたりしながら考えてみると、もう一カ月以上入院してから一日も休まないで来てくれていた。仕事でも週休二日制の御時勢だ。家政婦さん半日四千円というのに、親ならばこそタダで文句も言わずに手術の夜は一睡もせず看病してくれた。「そんなの当り前」み

たいに思っていたが、休まれてみて有難さが解る。ストライキされないと、雇い人のことなど考えてもみない資本家の幸せな気分やな！　と一人で苦笑。

何でもかんでもたたいて磨りつぶし、それでも歯にひっかかるから、りんごや大根おろしまで、ガーゼにこして搾りとる。小鳥の餌づくりさながらを、お母さんにベッタリそばで面倒みてもらっていると、この年になって離乳食の復習みたい。可愛い一人娘のことだから、けっこう嬉々としているようなので、親孝行の変形版。ところがこの乳児に、ヒゲの夫がいたりして、泥々に汚れたジーパンや洗濯物を持ち込んで、病室で着換えしてゆくものだから、背の小さいうちの母親が、まるで夜逃げか？　何かと疑うほど、大きな風呂敷包みをかかえて帰る破目になる。「お孫さんなくてお淋しいこと」などと言われていたが、この上、背中に荷物くっつけたげたら、マゴついちゃうヨ。

病院正面玄関の方をベッドの上から遠くぼんやり眺めていると、乗用車やバスがロータリーのあたりをゆっくりと走っていくし、人もポツポツ歩いている。建築パースの図面のように希薄な風景だ。

ポトリまたポトリ、透明なビニールの管の中を落ちる、点滴を見つめていると、眠く意識は遠くなる。

生命（いのち）って何だろう？　と考える。

透明な雫のことだろうか？　注射器に吸いとられる赤い血のことだろうか？

毎朝水をとりかえる、花の短い命は愛しいもの。シクラメンが明るい窓で、陽炎のように燃えている。パンくずをやると、鳩がクックウーと鳴きながら、たくさんテラスに寄ってくる。鉢植えの蕾がふくらんで、下から新しい葉が出てきたり、小さな頭をもたげているのをのぞきこんで、ピンと張った茎に触れては弾力を確かめたりしていると、「命って——はねかえす力だ」と、指に命の喜びが伝わってくる。

終日あったかい陽がふりそそぐ病室は、パジャマだけで暑いぐらいで、その上暖房されているから、夜でも冬と思えない。ガラスの向側が雪景色でも、寒風に枯れ木が耐えているのも、一枚の絵にすぎない。「外は寒いよ。今朝は三四郎池に氷はってたよ」と、あちこちペンキか謄写インクくっつけたヤッケに軍手で「調子どうや？」と現われる。「ここ暖いな」と言いながら石ケンで手と顔を洗っている。「ジーパンのお尻破れてるやんかあ」「アッほんま！　気いつかなんだ」ヘッチャラな顔している。ジーパンも破れるほどの事って？　一体この寒いのに何をしているのかと、のんきなこの奥さんでさえたまりかねて尋ねたくなるのだから、母が「洗濯してて、ものすごい汚れかたやけど、一体何してはんの？」「タテ看板かいたり、ビラ刷ったり、たき火したりでしョ」「そらススで汚れるわ」と、母でさえそうだから同室の奥さん達は「御主人の職業いったい何だろう？」と思っているらしく、でも私の線から割り出して「御主人も芸術家なんでしょ？」「イイエ全然違います」ちょっと顔を出しては、すぐ帰る。来てもほとんど何もしゃべらない。何しに来たのかと思うほどにしては毎日来てくれるからか、「随分こまめにチョクチョクお見えになって、おやさしいですネェー」「ええまあー」と濁しておく。「東大内に住み込んでますし、お隣りも占拠してますから」などと言えば、後の説明がめんどくさい。

「このごろ太ったみたいや」と言っている。毎日何を食べてるのか全然知らない。拘置所内では別人のごとく肥っちゃうし、これは運動不足らしいが、女房不在か不要か？　失格なのか？　無責任に「体だけは大事にね」

夕方八時前に彼はやってくることが多い。面会のお客さんと、この時間なら顔を合わせたり、挨拶する必要がないからだ。食後のお茶を入れて、三人でゆっくり飲んだりすると、普段は持たない夕餉のだんらんが、戻ってきたみたいで、病室に居間をもちこんで、日常の方が非常事態であったかのようだ。

口の中にピンセットつっこまれ、処置してもらっている横で、中年の看護婦さん二人が、知ってか知らずか？　消毒や薬をあつかいながら、「今日あすこ大変だったらしいわね。教授とっつかまっちゃったらしいわよ。学生に。ほら脳外科のサァー」「ほんとおー、学生じゃなくて赤レンガの青医連でしょう、何ごとによらずそうだから」「まったく若い人たち、しょうがないわねぇー」「いまさら教授つかまえたって、しょうがないでしょうにィ」と、何のくったくもなく話している。健康でありふれた、おおらかさが流れている。

なるほど「しょうがない」というのは言葉以上のうわばみのごとき観念だ。

当事者にすれば、「しょうがない」で済まされては、とんでもない事も、水かけ論の末に、「しょうがないものは、しょうがないでしょう」と打ち下ろされると、この論理もへったくれもない戯言（たわごと）が、日本では変に力をもっていて、大概うやむやに屈服させられていることが多い。歴史や国の政治にかかわる事件でも、個人的な問題に分断されて矮小な観点に流されて、もの解りよすぎて中途半端「一人であがいても、しょうがない」よしんば頑張っても「あれは一部の跳ねあがり分子のこと」と見過ごされ、責任は心臓から枝葉末節に移されて切り落とされる。次々と新しい絵に目がうばわれる走馬燈、温室の中のブラウン管ニュースもこのパターンだ。間接の間接でも見えてくるものはある。一国の大事は蓮見さん事件となり、世界革命や地球上の将来につながる事はさて置いてシンガポール石油タンク襲撃、アラブゲリラも日本赤軍とかも、岡本公三個人や元過激派Wとやら指名手配やお家の事情割り出し一色に塗りつぶされて、見せしめや血祭りでこれまでも形がつけられてきた。

昨日一枚の見慣れた達筆の葉書を受けとった。私が三年ほど勤めていた出版社の社長からで、刑期を終えて無事に出所したからという挨拶状だ。日大アウシュヴィッツとまで言われたマンモス大学の悪が、突如、怒りに燃えた若者たちによって裁かれていった、あの巨大な闘争の後に、誰の眼にも、悪がどちら側にあるかが、鮮かに浮び上っていたにもかかわらず、ただ学生達だけが圧殺されてゆき、氷山の一角というにも、お粗末な、しがない一会計課長と小出版社の社長だけが、罪に問われたに過ぎない。

〝逆こそ真なり〟と言いたいが、私自身も意気地なく「しょうがないしょうがない」と、世間の本質から逃げまわって、こんなところ迄来てしまい「これも、しょうがなかった」と言ってるうちに、物価が鰻上りにあがって、やっと外界に出る頃には、アゴが直っても目がとび出るほどで、「あら知らなかったの？　しょうがないわねえ」とアゴでしゃくられ、またまた歯を喰い縛らねばならぬかも。

集沫辞解

（しあ……しん）

編・著　呉　智英

しあわせ【仕合わせ・幸】〔語義〕幸福なこと。〔慣用句〕しあわせになろうね＝島倉千代子の歌。古き良き時代の殺し文句。しあわせなら手をたたこう＝坂本九の歌。肩たたくのは、おつかれさん。しあわせだなあ＝加山雄三の歌。しあわせな人だなあ、こういうことのいえる人は。

ジグザグ〔語義〕稲妻型に屈曲した線。〔派生語〕ジグザグデモ＝日本共産党が好まない。ジグザグ方針＝日本共産党が好む。ジグザグミシン＝日本共産党と無関係。

シクラメン〔語義〕植物の一。高級鉢植え用として有名だが、この和名が「ぶたまんじゅう」とは知らない人が多い。

じこけんお【自己嫌悪】〔語義〕自分で自分がいやになること。〔反省〕毎号毎号こういう原稿を書いていると自己嫌悪におちいる。ということを書いて、やっぱり自己嫌悪におちいる。と書いてまた、これではいつまでたってもおわらない。というふうに枚数をかせいで、また自己嫌悪。

しそう【思想】〔語義〕考え、主義、主張。特に左翼のそれをいう時がある。〔派生語〕思想犯＝思想関係の犯罪。戦前、厳しい弾圧の為、多くの思想家が権力にこび、歯の浮くような追従をしたが、これはいわばシソウノウロウ。戦後、蘇って闘いを挑んだのが、いわば歯医者復活戦。

ジスマーク〔語義〕主婦がよろこぶマーク。主婦が怒るのはキスマーク。

しちしょうほうこく【七生報国】〔語義〕①七度生まれ変わって、国恩に報いること。②七度生まれ変わって、国に報復すること。「七生」国（奥崎謙三）」と同。

しばれる〔語義〕こごえるようにさむいこと。北海道方言。〔考証〕「しばれる」は感じがよく出ているとか、方言の情緒に富む例であるとか、いろいろ喧伝されているが、誤り。語源は古語「凍む（しむ）」がM→B変化したものと推定される。「縛る」とは無関係であろう。

しまいとし【姉妹都市】〔語義〕友好親善を目的として都市と都市が結びつくこと。〔参考〕例としては東京とニューヨークがあるが、さほど相応しいとも思われない。むしろ、別府とニューヨーク、厚木とカイロ、朝霞とオハイオ、鹿児島とサイゴン、軽井沢とカルカッタ、などがおもしろいだろう。ヨーロッパに実在するスケベニンゲンなんていう所は、さしあたり長野県の夏埴（こうしょく）市がふさわしいであろう。

シミーズ〔語義〕女性下着の一。近頃ではスリップの方が優勢になり、ズロース、ちちバンド等と共に絶滅の危機に瀕している。フランス語が廃されて英語になるという女性用品では稀有な例。

しみん【市民】〔語義〕市に住む人。公害反対運動等の主役。住民と市民では、住民の方がもちろん範囲が広い（二・五倍広い）。〔参考〕水俣の運動では「死民」と称している。これでゆけば、野球場のナイター公害で悩むのは「大阪不眠」、東京は「富民」ではなく「ゴミン」であろう。

しめんそか【四面楚歌】〔語義〕まわりを敵にとりかこまれること。史記（項羽本紀）の垓下の故事による。〔考証〕とりかこんだ敵が、敵の歌を歌うように一般に解されているがこれは誤り。楚の項羽を包囲した兵が、実は楚の歌を歌う楚人であるからこそ絶望的なのであった。鏡張りの箱に入れたガマに、でんでん虫の歌を聞かせても驚くまいが、カエルの歌が聞こえてくるよ、とやれば、ガマは心底おびえるであろう。

しゃかい【社会】〔語義〕世の中、世間。〔参考〕某財界人曰く「社会はひっくりかえせば会社である。両方共同じようなものだから、会社の為に力を尽すことは社会の為に力を尽すことだ」。さすが人の上に立ち、財を成す人は発想がすばらしい。ただ恐れ入る他はないが、こういう考え方を会社でも社会でも通用させようとするのには「わたしまけましたわ」。試みに、「鯛釣り舟に米を食べ食べ」というのどかな漁村風景をひっくりかえしてみるがいい、一転して愛染煩悩の世界が現出する。

しゃくはち【尺八】〔語義〕楽器。金管楽器ではなく、木管楽器であることはフルートと同じ。〔参考〕性器接吻のことも意味するが、洋の東西を問わず笛になぞらえられるところがおもしろい。だからフ・エラチオという、というのは俗説。手軽にできる避妊手段であることは周知の事実、中国でも人口調整の為、積極的に奨励されているという。「ドグラ・マグラ」に、「胎児よ胎児、なぜおどる」という歌があるが、俚諺に曰く、笛吹けば胎児おどらず。

ジャック〔語義〕船乗り。転じて海賊。〔参考〕現在では「ハイジャック」「シージャック」等、乗っ取りのことをいう。万国博最大のトピックであるタワー乗っ取りは「アイジャック」といわれたが「片目のジャック」といったほうがよかった。もし通天閣を乗っ取れば、ツーテンジャック。他人の妻を乗っ取れば、これはジャックワイフ。

シャネル〔語義〕フランスの有名な香水。特にNo.5は、モンローがベッドで唯一身につけたものとして名高く、その移り香のある遺品は、香水はわがパンティーに及び、と珍重される。

ジャンボ〔語義〕巨大なもの。特にジェット機をいう。〔参考〕語源は不詳、アフリカ土語か。ジャンボジェット機を中国語で何と書くかというと「珍宝噴射機」。白髪三千丈の国だけある。（→珍宝）

ジュー〔語義〕ユダヤ人の蔑称。第二次大戦中の在欧日本人が、ナチにこびて「九一（十）」という品のない隠語を使ったと石田英一郎はなげいた。

じゆう【自由】〔語義〕①束縛されないこと。②資本主義の美称。「自由主義」「自由世界」等、いかにもすばらしい語感を伴うが、自由な職業といっても「自由業」と「自由労働者」では雲泥の差があることをふまえなければならない。

しゅうまつ【週末・終末・集沫】〔語義〕①一週間の終り。土曜・日曜日の名称は月曜から数えはじめるのが正しいことがわかる。②終わること。キリスト教では、悪魔が放たれて終末が出現する。出版界ではチクマの編集者がハナ垂れながらやっている。③うたかたのようなものを集めること。そうして編まれたのが本書「集沫辞解」である。

しゅうようじょれっとう【収容所列島】〔語義〕ソルジェニーツィンの最新作。この作品の為、彼はソ連当局の弾圧と追放を受けている。〔参考〕ソ連の収容所は「強制収容所」ではなく「矯正収容所」である。翻訳の皮肉というにはあまりにもすごい。

しゅうちにくりん【酒池肉林】〔語義〕酒を池と成し、肉を林と成す豪華な宴。〔考証〕史記（殷本紀）の紂王の故事による。字面から受ける印象で誤解を生じやすいが「肉」は単なる肉で、要するに酒と料理である。では健全娯楽なのかというと、裸の美男美女が数知れずはべっているのであって、やっぱりはじめの誤解が正しいのである。

じゅん【淳】〔語義〕日本三大作家論の著者の名前。「森鷗外」の石川淳、「夏目漱石」の江藤淳、「司馬遷」の武田泰淳。名前の最後に「淳」がつかない人は良い作家論は書けないのである。

じゅんきっさ【純喫茶】〔語義〕純粋に喫茶だけを営む店の意味であろうが、よくわからない。コーヒーもミルクも呑めるし、トースト類もアルコール類もある店がある。同伴喫茶ではないということかもしれない。

じゅんぶんがく【純文学】〔語義〕文学青年だけが好む文学。大学の文学部にも英文学とかフランス文学等とならんで、純文学という学科ができるとおもしろいだろう。大学の職業予備校化の典型として新たな大学闘争の火種となるにちがいない。

ジョア〔語義〕プラスチック容器を利点に売りだしながら、ゴミ問題であわてている乳酸飲料の商品名。〔参考〕プラスチック容器で困っているのはジョアにかぎらない。街の食堂にトンカツ定食の出前をたのむと、プラスチック容器で持って来るようになったのはついこの前のこと。それが近頃は、また容器を回収に来るので尋ねてみると、「マスコミがうるさくてねえ、TVでもやってるでしょ、ほら、カツ回収」。

じょうをつうず【情を通ず】〔語義〕報道の自由の大義名分のもとに行われる男女交際。女はタネを得てネタを売り、男はネタを求めてネタ。鉄壁の如き報道管制も小さな穴から崩れる。俚諺に曰く、万里の土手も蟻の門渡りから崩れる。

じょうい【上位】〔語義〕上に位置すること。〔考証〕「女上位」という語句は、女性主導型性交体位を表すものであって「女＝じょ」と発音するのが正しい。「おんな上位」という読み方で女権伸張を表わすのがマスコミの通例であるが、それなら女房の後で小さくなっている恐妻家などは「背向位」とでもいうのであろうか。

しょうだん【商談】〔語義〕つれこみホテルへ入って、あと一枚、いやそうは出せないと談判すること。商談につかれたら御休憩する。

しょうちょう【象徴】〔語義〕シンボル。日本の象徴は、物価騰貴と公害であろう。ところが日本国憲法には、日本の象徴は天皇であると記されている。このことからみても物価騰貴と公害は憲法違反であることは自明である。

じょうねん【情念】〔語義〕感情や思念。〔考証〕情念という語は、デカルトの訳書に「情念論」という題がついているように、新造語

ではないのだが、六十年代後半頃さかんに使われ、感情、情熱、情況、思念、怨念、観念、等の意味もおりこまれている。漢字熟語に弱い人達の喜びそうなことばである。

しょうひしゃ【消費者】〔語義〕裸の王様。ふと気がつくと本当の王様は、しょうしゃだった。

じょおう【女王】〔語義〕女の王。「ジパの女王」にしろ「女王蜂」にしろ、正しく読める人が少い。十中八九まで「じょうおう」と読むから不思議である。

じょし【女子】〔語義〕女の子。女性。〔成句〕女子と小人は養いがたし＝論語にあることば。中国で孔子批判が進んでいるというが、この一句を吟味しただけでも孔子がいかに時代遅れの代物かわかる。女子と小人はプロレスに出ればうんと儲かる。

しょじょ【処女】〔語義〕きむすめ。神聖なイメージがあるためか種々の形容詞としても使われる。キャンパリという酒は「処女の味」などと宣伝しているが、たかだか赤い色の酒というだけ。独身男の味コニャックというような含蓄がほしい。〔参考〕結婚をひかえたある男、妻となる女性が処女であるかどうか不安でしかたがない。悪友に鑑別法を聞くと、指が一本入れば処女、二本なら非処女と、でまかせに教えた。さて新婚旅行から帰った件の男、うかぬ顔つきをしているので、悪友さてはと思い「どうだった二本かい」と聞けば、男「太平洋」。

じょちゅう【女中】〔語義〕奉公人の一。〔考証〕近頃は「おてつだいさん」という変ないいかたが多いが、「おてつだいさんお菊の亡霊が……」では皿屋敷も台無しだし、「おてつだいさん頭」が「女中頭」とは気がつかない。呼称を変えても内容は進歩していない。すでに、女中は下女より格が上なのである。

じりつ【自立・自律】〔語義〕外からの規制を廃し、自主的なこと。〔参考〕自立を標榜する人が会を作って、その会規に曰く「一、自立者は自立主義者であってはならず、ましてや自立主義主義者であってはならない。一、自立者の娯楽はTVであり、探偵小説、就中シャーロックホームズを好んではならない。一、自立者は巫山戯てはならないが、竹内芳郎（こと中原浩）のようにむっつりしていれば良いというものではない。一、自立者は、江藤淳がカンパ要請を拒否したことを賞讃しても、丸山真男が封鎖協力を拒否したことは嘲笑わなければならない。」以上のことは、もちろんフィクションであるから、真実のところはうかがいしれない。但諺に曰く「自立は小説よりも奇なり」。

じんぎ【仁義】〔語義〕人の間で守るべきすじみち。仁義なき闘いがとやかくいわれるように、相争う者の間でも仁義を重んじるのが農耕民族としての日本人の性格である。同じ東洋人でも騎馬民族である蒙古人などはジンギスカン。

しんこう【新興】〔語義〕新たに興ること。〔派生語〕新興宗教＝新興の宗教。仏教だってキリスト教だって最初は全部新興宗教なのだから、新興宗教であることは決して悪いことではないが、必ず古めかしい由来譚があるからおもしろい。新しい奴ほど古いものをほしがるものでござんす。〔参考〕左翼の新しい派を、新興左翼とはいわないのが妙。

じんこうじゅせい【人工受精】〔語義〕人工的に行われる受精。考えてみれば迂遠なことである。〔参考〕人工受精で待望の赤ちゃんをもうけたある夫婦、不思議なことに愛児は母乳に見むきもしない。人工受精だから人工栄養というわけでもあるまいと、医者に相談すると「なあに人工受精だからチチを知らないのですよ」。

しんじゅく【新宿】〔語義〕地名。東京の繁華街の一。副都心とか若者の街とかいわれているが、もちろん宣伝だけである。「若者の街」は一駅隣の代々木である。

ジーンズ〔語義〕ジーパンの新しいよび方。呼称が変っただけじゃないか、というのはあやまり。値段もずいぶん変った。

じんぞうにんげん【人造人間】〔語義〕人工的に作られた人間。〔考証〕人造人間というと、いかにもガォーッと吠えだしそうで楽しい、紙芝居でよく見たものだなというと年が知れる。今はロボットとさえもいわない。アンドロイド、サイボーグという。現物は未だつくられていないのに、ことばだけがどんどん先行してゆく好例。

しんぶん【新聞】〔語義〕社会の出来事などを記す定期刊行物。〔派生語〕新聞少年＝アルバイト等で新聞配達をする少年。家庭の主婦が内職として夕刊だけ配るのは、夕刊マダム。

しんぽ【進歩】〔語義〕進んでいること。〔派生語〕進歩的文化人＝言うだけで実行の伴わない知識人のこと。実行しないで何をやっているかというと、シンポジウムに出ている。

じんるいがく【人類学】〔語義〕①人間の肉体やその作用を研究する学問。形質人類学。②人類とは何かを広く研究する学問。文化人類学というのもあるが、「文化人類学」ということばをはじめて聞くと、ははあ、文化人達はやっぱり特殊な人類だったんだな、と思ってしまう。